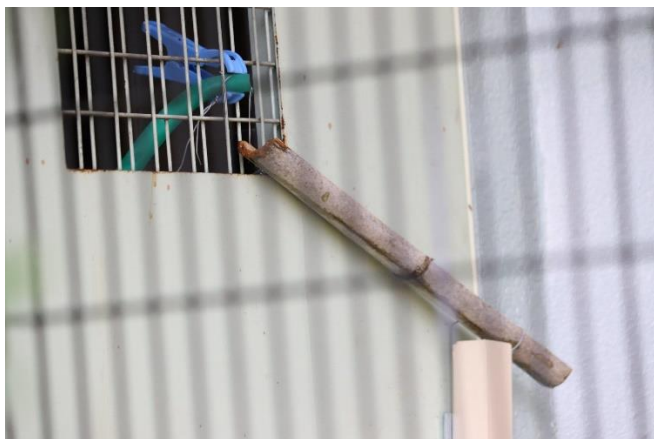
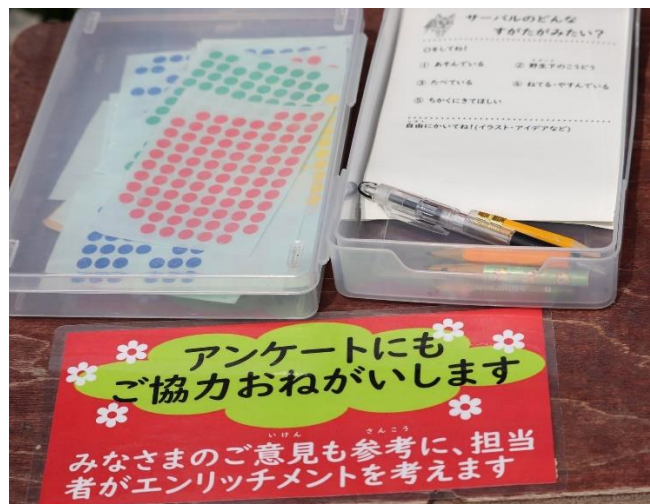


推薦する取り組み	園館名
お客さんを巻き込んで可視化する 環境改善の取り組み	わんぱくこうちアニマルランド

推薦理由

わんぱくでは、既存の獣舎の空間をより快適な空間へと、ソフト面の見直しと改善を順次行っています。サーバル舎では、狭いコンクリート空間だった獣舎に、土や草を入れ植樹をし、トレーニングエリアを設け、水を新鮮な状態で飲める工夫をし、より快適な空間へと変化をしています。推したいのはここからで、園サイドで自己完結するのではなく、改修前の獣舎での動物がどう見えるか、改善後、動物がどう見えるか アンケートを実施し、また、どういう姿が見たいか等の意見を募っています。お客さんを巻き込み、お客さん視点の感じ方を視覚化しつつ、ビフォーアフターで意見を募る姿勢はとてもいいと思います。お客さんを巻き込むことで、お客さんも 漠然と動物を見ず、意識して見るようになり、より、色んなことに気づいたり深い行動観察・環境観察が出来るのではないのでしょうか。



推薦する取り組み	園館名
クロシロエリマキツネザルの闘争から 平和を取り戻すために	わんぱくこうちアニマルランド

推薦理由

クロシロエリマキツネザルは雌雄とその子供を中心とした、複雄複雌の家族で生活しています。当園では、ペア2頭とその子供4頭を飼育しています。2017年より繁殖制限のため、雄雌を分けて管理をはじめました。同時期に雄同士の闘争が始まりました。社会的な関わりが多すぎること、互いの行動が見えすぎてしまうことが闘争の要因と考えました。構造物を増やし視線を合わす回数を減らし、3次元的空間利用を促すことで闘争を減らすことができました。これらは改修前、改修後と弱い個体がプレッシャーをかけられ鳴く回数をアドリブサンプリングで定期的に評価しました。改修前は平均40回、第1回改修後1カ月経過時の平均は14回、第2回改修後の平均は5回と徐々に鳴く回数が減少し効果が見られました。闘争が起こった時に個体を分離するのではなく、視線を遮り、3次元的空間利用を増やすことが関係改善に効果的であることがわかりました。この取り組みで闘争は緩和されましたが、2022年の繁殖期が近づくと軽度の追尾行動が再開しました。エリマキツネザルの闘争に関するホルモン動態を報告している例はなく、テストステロンが闘争に関与しているのではないかと仮説を立て、2022年より糞中テストステロン動態を調べ、雄豚用去勢ワクチンでホルモンの放出を抑える試みをしました。その間今までと同様、個体間での闘争や追尾行動をアドリブサンプリングで記録しました。その結果、エリマキツネザルの闘争行動にはテストステロンが関与していることがわかりました。ワクチン接種後、テストステロン値は下がり闘争行動も完全に消失しました。この取り組みから、多くの動物園で問題となっている、エリマキツネザルの単独飼育を避けることができるようになりました。環境を複雑にし、ホルモンの放出を抑制することは、動物園で飼育されているエリマキツネザルの問題解決に繋がり、動物福祉の向上となると考えています。

環境エンリッチメントを用いた闘争抑制

狭い場所で互いの行動が見えすぎて闘争が起きるのでは？



展示場の餌場・目隠しの増設



行動評価

- ・アドリブサンプリング
- ・7日間×10回
- ・25分間にAが鳴いた回数をカウント

方法③

行動サンプリング

オス個体における敵対的交渉を行動サンプリングで記録

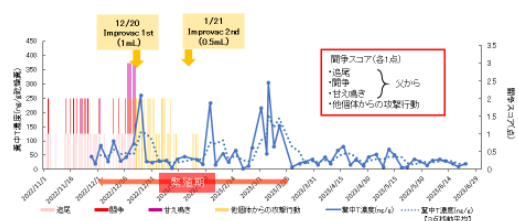
観察方法：アドリブサンプリングで清掃時
(1日2回 各40分間)に評価

- 評価項目：
- ① 闘争をしかける
 - ② 追尾
 - ③ 甘え鳴き
 - ④ 他個体からの攻撃行動
- 闘争の開始時に
よく観察される
- 父



トレーニングにて採血や麻酔薬投与

レム♂ 闘争行動(2022年～2023年)



接種前：父から息子Aに対して一方的な攻撃行動が集中

接種後：1回目接種後すぐに父の攻撃行動が消失し、他のオスからの攻撃を受けることがあった
・2回目接種後には全頭の闘争行動が消失

Improvac接種により繁殖期の闘争行動は明らかに減少



平和になる

推薦する取り組み

園館名

食品ロスから動物園の食卓を彩る

わんぱーくこうちアニマルランド

推薦理由

わんぱーくこうちアニマルランドでは、動物たちの餌は基本的に決まったメニューを与えることがほとんどでした。また、飼料費の高騰などから、バリエーション豊かな餌を与えることは困難でした。そこで SDGs の取り組みとして「⑫つくる責任・つかう責任」を市民と協働し達成し、動物たちの餌のバリエーションを増やす目標を立てました。捨てられる野菜や果物を寄付していただくことで与える餌の種類を増やし動物福祉の向上となり、資源の有効活用、環境教育につながります。2024 年月 15 日～3 月 20 日の約2か月間、取り組み期間内で、37 種 147 件、2038kg の寄付がありました。またこの取り組みは一般市民と協働が目的であったため企業への寄付依頼はしていません。枝についたままの柑橘類の寄付もあり、チンパンジーでは枝から果物をもぎ取って食べる行動を再現することもできました。野生下のチンパンジーはおよそ 200 種類 of 食物を採食していると言われています。取り組み前は約 10～15 種類の食物を与えていましたが、取り組み開始期間では 30 種以上の野菜果物を与えることができました。また、モルモットは、体内でビタミン C を作ることができないため、餌から摂取しなければなりません。SDGs 取り組み期間中は、普段の約4倍のビタミン C を摂取できる餌を与えることができました。野菜果物の購入量が減ったことにより余剰となった予算で、屠体給餌のための肉や、普段は高値のため購入できない野菜や果物を購入し与えることができました。その他にも柑橘類などの果物を収穫せず放置することは野生動物を引き寄せ獣害の要因になっています。栽培したものは収穫し適切に処理するという過程の一部を、当園が担えたこともよかったと気づきました。この取り組みは市民と協働し取り組むことで、普段訪れる機会が少ない層の方にも動物への愛着も持つてもらうことができました。2か月間の試行期間を経て、今後も動物福祉向上のため、継続していく予定です。



丸ごとカボチャ



丸ごと芽キャベツ



野生化再現



削減予算で福祉向上



お互い笑顔になれる